

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳論のために

山岡洋一

- 翻訳論の出発点

ソシュール『一般言語学講義』の日本語訳と英語訳を比較すると、たいていの人は英語訳の方が分かりやすいという印象をもつのではないだろうか。

ひとさまの誤訳(第12回)

柴田耕太郎

- 『eTrans Learning 4月号』(バベル・プレス刊)

この雑誌の内容は、大学受験生対象以下のレベルである。「翻訳英文法」なるものの再構築を望みたい。

辞書評論

津森優子

- 翻訳者にとって使い勝手のいい類語辞典 藤本直編著『類語玉手箱』

翻訳者が30年かけてつくったCD-ROM版の類語辞典を紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳論の出発点

欧米では近年、翻訳論とでも呼ぶべき分野の研究が盛んになってきたという。自分の仕事に関する理論なのだから、もちろん興味があり、主要な論文をいくつか読んでみた。だが、翻訳論がはたして役に立つものなのかどうか、疑問だと感じた。もちろん翻訳論を研究すれば、大学に職を得る手掛かりになるという人もいるのだろう。そういう意味では実利に直結しているのだろう。

翻訳論はたいてい、既存の理論の応用分野が特殊分野という形をとっているようだ。言語学の応用研究であったり、文学論や文化論の特殊分野であったりする。哲学や思想の応用研究という場合もあり、ポスト・モダンやポスト・コロニアリズムなど、最新流行の思想を下敷きに翻訳を研究する人もいるようだ。翻訳論にはこのように多彩な立場からの研究があるのに、翻訳そのものを真正面から論じる人は少ないのではないかという奇妙な印象を受ける。翻訳を理論的にとらえようとするとき、対象を具体的に確定するのは難しく、出発点を確定するのは一層難しいのかもしれない。

どのような理論でもそうだが、実務に取り組むものの感覚というのはまず当てにならない。理論というからには実務から何歩か離れて、幅広い視野から全体像をとらえなければならぬ。いつも目先の仕事に追われているものに、そのような視野がもてるはずがない。200年以上前、経済学の源流といわれる『国富論』が刊行されたとき、商売をしたことがない著者に経済のことが分かるはずがないと非難した人がいたという。アダム・スミスは公益という観点から商工業者の貪欲と独占欲に悪口雑言を浴びせたのだから、これぐらいの厭味をいわれることは想定の内だったかもしれない。その後、アダム・スミスが商売をしたことがないからこそ、経済の動きを明らかにできたのだとみられるようになり、『国富論』は経済学の古典中の古典とされるようになった。この例からも明らかのように、実務に取り組んでいるものの感覚というのはたいてい当てにならない。だが、その点を承知のうえで、実務の感覚から翻訳論を探ってみたいと考えている。

翻訳論の出発点になりうるもののひとつに、たとえば資料1のような訳文がある。フランス語で書かれた原文の日本語訳と英語訳を比較したものである。

資料1 フランス語原著の日本語訳と英語訳

ところで、言語 (langue) とはなんであるか？ われわれにしたがえば、それは言語活動 (langage) とは別物である；それはこれの一部分にすぎない、ただし本質的ではあるが、それは言語能力の社会的所産であり、同時にこの能力の行使を個人に許すべく社会団体の採用した必要な制約の総体である。言語活動は、ぜんたいとして見れば、多様であり混質的である；いくつかの領域にまたがり、同時に物理的、生理的、かつ心的であり、なおまた個人的領域にも社会的領域にもぞくする；それは人間的事象のどの部分にも収めることができない、その単位を引きだすすべを知らぬからである。(フェルディナン・ド・ソシュール著小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年、21ページ)

But what is language [*langue*] ? It is not to be confused with human speech [*langage*], of which it is only a definite part, though certainly an essential one. It is both a social product of the faculty of speech and a collection of necessary conventions that have been adopted by a social body to permit individuals to exercise that faculty. Taken as a whole, speech is many-sided and heterogeneous; straddling several areas simultaneously--physical, physiological, and psychological--it belongs both to the individual and to society; we cannot put it into any category of human facts, for we cannot discover its unity. (Ferdinand de Saussure, *Course in General Linguistics*, trans. Wade Baskin, McGraw-Hill Paperback Edition, 1966, p. 9)

このあいまいは、当面の三個の概念を、あい対立しながらあい呼応する名前をもって示したならば、消え失せるであろう。われわれは、記号という語を、ぜんたいを示すために保存し、概念 (concept) と聴覚映像 (image acoustique) をそれぞれ所記 (signifié) と能記 (signifiant) にかえることを、提唱する；このあとの二つの術語は、両者間の対立をしるすにも、それらが部分をなす全体との対立をしるすにも、有利である。記号は、それで満足するとすれば、それにかわるものを知らぬからである；日用語には満足なものが見当たらないのだ。(同上97ページ)

Ambiguity would disappear if the three notions involved here were designated by three names, each suggesting and opposing the others. I propose to retain the word *sign* [*signe*] to designate the whole and to replace *concept* and *sound-image* respectively by *signifié* [*signifié*] and *signifiant* [*signifiant*]; the last two terms have the advantage of indicating the opposition that separates them from each other and from the whole of which they are parts. As regards *sign*, if I am satisfied with it, this is simply because I do not know of any word to replace it, the ordinary language suggesting no other. (Ibid., p. 67)

この翻訳を読むと、たいていの人は日本語訳より英語訳の方が分かりやすいという印象をもつのではないだろうか。同じ原文を翻訳した文章を読んだとき、母語である日本語に訳されたものより、外国語である英語に訳されたものの方が内容を理解しやすいと感じる。これはとんでもなく意外なことのはずだ。仰天するしかない現象である。なぜこのようなことが起こるのか、じっくり考えてみる価値があるはずだ。

だが実際には、この事実に驚く人はそう多くないかもしれない。意外だとも問題だとも思わない人が少なくないはずだ。そうした人たちの見方はおそらく2つに分かれている。第1が諦めと無関心である。この種の翻訳は所詮こういうもので、読んでも理解できるはずがないと考えている。だから、読もうとは思わない。関心がないのだから、英語で読めば内容を理解しやすいという話を聞いても、とくに驚くはずがない。このような反応を示す人がおそらく大多数を占めているとみられる。第2が満足である。このような翻訳で満足している人も少数いる。アダム・スミスが『国富論』第4編第9章で指摘していることだが、人は誰も他人が理解していないことを自分だけは理解していると思いたがるものだ。このため、たいていの人が理解できないはずの翻訳だからこそ、喜んで読む人がいるのだ。この見方については後に触れることにして、まずは第1の諦めと無関心について考えていこう。

この種の翻訳は読んでも意味を理解できるはずがないとたいていの人が考えている。この種の翻訳というのは、言語学などの学問分野の翻訳という意味でもあるが、それ以上にいわゆる翻訳調の翻訳という意味だ。資料1を読むだけでもこの見方は正しいといえるはずだが、翻訳者の実感からもこの見方の正しさが裏づけられると思う。翻訳者はたいてい締め切りに追われているので、原文の意味をしっかりと理解したうえで訳文が書けるとはかぎらない。原文を理解するために時間を使う余裕すらない場合や、原文をいくら読んでも意味が理解できず、資料を調べても、インターネットで検索しても理解できない場合にどうするか。最後の手段として頼るのが直訳と呼ばれる方法である。英和辞典に書かれている代表的な訳語を使い、学校英語の英文法と英文和訳で教えられる公式通りに訳すのが直訳だ。この方法は漢文読み下しの方法を応用して、意味が分からなくてもそれらしい訳文を書けるように作られているので、こういう場合に便利なのだ。もちろん、いわゆるかたい文章、こなれていない文章、翻訳調の文章になる。それでも読者は理解できるのかもし

れないし、少なくとも原文に何が書いてあったのかを伝えることができると期待する。それに、原文通りに訳したのだから、誰にも文句をいわれることはないとも考える（実際には、原文の訳し方として学校英語で教えられる通りに訳したにすぎないのだが）。

要するに、資料1に示したようなスタイルの翻訳は通常、書き手である訳者が意味を理解できないままに書いたものだ。だから、読んでも理解できるはずがないという感覚はまったく正しい。理解できると考えるほうがおかしい（ただし、理解がまったく不可能だというわけではない。訳文から原文を推測できれば、意味が分かる可能性がある）。

だが、以上は翻訳者の実感に基づく議論である。実務家の感覚という少しは恰好良く聞こえるが、要は締め切りに追われて悲鳴を上げた体験を語っているにすぎない。並みの翻訳者の場合、意味を理解できない部分を訳さないわけにはいかないから、最後の手段として使うのが翻訳調なのだが、小林英夫が翻訳調で訳したときに、同じように考えていたとは思えない。事情が違っていたはずだと考えるべきだろう。

なぜかという、ひとつには、小林英夫が言語学の第一人者であり、とくにソシュールの紹介と研究で知られる学者だからである。それに、引用箇所は『一般言語学講義』でもとくに有名な部分だ。ソシュール言語学の入門書や解説書ではかならずといっていいほど取り上げられる。そのうえ、引用は1972年版からだが、小林英夫は1928年と1940年にも同じ本を翻訳している（ただし題名が違って、『言語学原論』だった）。これは3回目の訳なのだから、並みの翻訳者が原文を理解していなかったときに苦し紛れに使うのと同じスタイルで訳しているからといっても、小林英夫が原文の意味を理解していなかったとは考えられないはずである。

もうひとつ、小林英夫は自分の翻訳について、並みの翻訳者とはまったく違った見方をとっていたといえる事実がある。資料2に、『一般言語学講義』の「訳者のはしがき」と、『言語学原論〔改訂新版〕』の「譯者の序」から、いくつかの部分を引用した。

資料2の文章は、主張と文体の両面で仰天するしかないものではないだろうか。翻訳調はもともと、欧米の文献を訳すために、日本語のリズムや特徴をかなりの程度まで無視して作られた人工言語のようなものだ。だから、訳者は翻訳調が本来の日本語とは違ったもの

資料2 小林英夫の見方

ここでわたしの自らに課したしごとは、じぶんながらに理解しえた Cours の思想を、できるだけわが身にちかい現代語で再現することである；本文の訳出にあたっては、うらには万端の用意を控えながら、つねに等量の移植をはかることである。翻訳である以上、過不足の出ることはつしまねばならない。（『一般言語学講義』「訳者のはしがき」vi ページ）

もちろん原書の予想する読者層は、必ずしも訳者の予想するわが国のそれとは一致しないであろう。戦後わが国に言語学熱が急速に高まったとはいえ、まだまだ Cours を受け入れるだけの予備知識には欠ける所が多いにちがいない。ことに国語学徒などは、ヨーロッパ語のいくつかを習得する余裕はないことであろう。またここ数年らい、構造主義のブームにつれて、哲学者、文化人類学者、民族学者、その他多方面の学徒から、Cours 理解の要求が熾烈になりつつある。

そのような、いわば言語学のズブのしろうとの方がたにも、なんとかして本書を近づけて上げたい、というのが、このたびの訳者の悲願なのである。（同上 vi ~ vii ページ）

翻訳にあたってわたしのもっとも重要視するのは、リズムを写すことである、よしんば対象が学術書であってもである。文勢とはそのことをいう。文勢を欠く文章は死んでいる。語を生かして文を殺し、文を生かして文章を殺す。そのような死んだ文章がひとを動かせる道理はない。（同上 x ページ）

そのようにして朱を加えられた原稿にもとづいて初校刷りをえたが、こんどはこれを国語学者亀井孝氏の閲に供した。わたしが氏から拝借しようとしたのは鋭敏な語感である。国語・国文にたいする氏一流の潔癖は、わたしの訳文の、想いもよらぬ所に盲点をあばいてみせた。（同上 xi ページ）

国語学者亀井孝氏には、別の役割を受け持つていただいた。氏は専ら譯文の閨手となられた；眼によりも耳に訴へて、朗々誦すべき文章に仕上げるといふのが私の主張の一つであつたから。期せずして、私は振仮名廢止論を實踐することとなつた。私は氏から國語に関する該博な知識と繊細な感覺とを拜借したのである。（『言語学原論〔改譯新版〕』「譯者の序」9 ページ）

であることを自覚しているのが普通だ。この点を示すように、典型的な翻訳調で訳された本でも、たとえば「訳者後書き」では、別の文体が使われているのが通常である。ところが、言語学の第一人者であり、言語に人一倍敏感なはずの小林英夫は違っている。「訳者のはしがき」ですら翻訳調を使い、これが「わが身にちかい現代語」なのだと断言しているのである。念のためにつけくわえるなら、この「訳者のはしがき」が書かれたのは 1972 年であって、それほど昔ではない。

たとえば、「国語・国文にたいする氏一流の潔癖は、

わたしの訳文の、想いもよらぬ所に盲点をあばいてみせた」という文章が翻訳調だと思うのは、言語感覚が鈍いためなのだろうか。句点も読点も使わず、ピリオドとコンマを使い、セミコロンすら使っているのを見て目をおおいたくなるのは、「国語に潔癖」でないためなのだろうか。「それは言語能力の社会的所産であり、同時にこの能力の行使を個人に許すべく社会団体の採用した必要な制約の総体である」という文章は眼にも耳にも訴えるはずがないと思うのは、眼も耳も悪いためなのだろうか。「Cours の思想」のように、固有名詞をすべてアルファベットで表記している（ちなみに Cours は『一般言語学講義』の原著を意味する）が、コンピューター雑誌などで欧米の固有名詞をアルファベットで表記しているのを見て腹立たしく感じるのは「言語学のズブのしろうと」だからなのだろうか。小林英夫訳なぞ読むべきではなく、少々不自由でもフランス語の原著か、英訳を読むべきだと思うのは、「学徒」ですらないためなのだろうか。

『一般言語学講義』の訳文を読み、「訳者のはしがき」を読めば、言語学の碩学、小林英夫がどのような文体を理想としていたのかがよく分かる。翻訳調と呼ばれる文体こそが正しいと考えていたはずだ。翻訳調と呼ばれる文体こそが日本語の理想であり、格調の高い文体であり、「朗々誦すべき文章」であり、「生きた文章」だと考えていたはずだ。「日本語らしい日本語」などと呼ばれる文体は、『一般言語学講義』で使われた言葉を借りるなら「俚語〔りご〕」、つまり田舎の言語、卑しい言語、俗っぽく低級な言語、下品な言葉にすぎないと考えていたはずだ。そしてこのような見方を支えていたのは、「ヨーロッパ語」こそが高級な言語だという感覚なのだろう。日本語のさまざまな文体のうち、「ヨーロッパ語」にもっとも近いものが高級であり、「ヨーロッパ語」から遠いほど低級な文体である。そういう感覚がなければ、上に引用したような文章を書くはずがないと思う。

小林英夫は言語に敏感であるべき言語学者なのに翻訳調の悪文で訳し、悪文を書いていると考えるのは間違っていると思う。言語学者であり、「鋭敏な語感」をもっているからこそ、このような文体で訳し、書いているのである。

小林英夫は凡庸な言語学者ではない。言語学の第一人者である。ソシュールの『一般言語学講義』は並みの本ではない。言語学の出発点とされる名著である。言語学を学ぶものなら、誰でも読むはずの本だ。そして言語学は翻訳の理論を考えるうえで無視するわけに

はいかない分野だ。だから、翻訳論を云々する以上、必読の本である。その本が日本語訳では理解しにくく、英語訳を読んだ方が理解しやすい状況にあるのだ。しかも、この翻訳に使われた文体は格調が高く、「生きた文章」と主張されているのである。

翻訳とは何なのかを考えると、絶好の出発点になりうるのではないだろうか。

小林英夫のソシュール訳のような翻訳をどう考え、どう分析するかが翻訳論の出発点になりうると思う理由はもうひとつある。翻訳論を論じようとする人に、このような翻訳を喜ぶ人が少なくないように思えることである。

翻訳論の基礎とされることの多い言語学、哲学、思想の分野では、小林英夫の垂流のような翻訳が多い。こうした翻訳を喜んで読む人は前述のように、他人が理解していないことを自分だけは理解していると思いたがる人であることが多い。そして、翻訳の実務から何歩か離れて幅広い観点から理論を考えようとするのではなく、翻訳の実務とは無縁なところに、理論のための理論を構築しようとする場合が多い。そうした人たちが翻訳論研究の中心になっていけば、おそらく、翻訳の実務と翻訳の理論とはまったく接点がない状態になるだろう。

翻訳の実務という観点からいえば、それでもとくに問題は無いともいえる。翻訳論というものがあっても、自分たちにはまったく無縁だし、不要だという姿勢をとることも可能だからだ。現に、大きな書店に行けば何冊かは並んでいる翻訳の理論や翻訳の技法などの本をまじめに読んでいる人は、翻訳者のなかではごく少数にすぎないはずである。翻訳の理論も翻訳の技法も安心して無視できる。そんな本を読んでも翻訳の実務に役立つわけではないし、逆に邪魔になることが少なくないからだ。

もう 10 年以上前に翻訳出版のベテラン編集者から聞いた話が忘れられない。翻訳のノウハウ書を書いた翻訳者は何人かいるけど、みな、お世辞にも翻訳がうまいとはいえない、ノウハウをまとめたりすると、それに縛られて翻訳がぎこちなくなるのじゃないかというのだ。この話を聞いてから、翻訳のノウハウ書を読もうとは思わなくなった。おそらく、翻訳の理論でも同じことがいえるだろう。

だが、翻訳の実務にたずさわるものとして、明確に

しておきたい点がある。

小林英夫が苦心して作った用語は現在、ほとんど使われていない。「言語」は「ラング」、「言語活動」は「ランガージュ」、所記は「シニフィエ」、能記は「シニフィアン」と呼ばれるのが普通になっている。これらの片仮名語を使った知ったかぶりが、翻訳の理論だとされることもある。こうした議論を好む人たちは、20 世紀前半ならともかく、いまの時代の翻訳を理解するうえで不利な立場にあるはずである。いまの時代に優れた翻訳を行っている翻訳家には、こうした記号遊びのむなしさを知っている人が多いからだ。

小さな子供が遊んでいる様子をよく観察してみるといい。子供は言葉が大好きだ。意味が分からない言葉をつぎつぎに覚えていく。まず言葉（小林英夫のいう能記）を覚え、つぎにその言葉の意味内容（小林英夫のいう所記）を覚える。お隣りのクロ、お向かいのミケなどの具体的で直接的な対象を知り、そこから抽象的な概念を示す「猫」という記号を覚えるのではない。まず「猫」という記号を覚え、つぎにこの記号をお隣りのクロやお向かいのミケなどに結び付けていくのである。だから、動物園に行ったことがなくても、「ライオン」とか「象」とかの記号を知っている。

少し大きな子供と話すと、大人がまったく知らない言葉を大量に知っているのに驚かされる。たとえば、ポケモンというと、大人が知っているのはピカチュウぐらいだが、子供は何十もの名前を知っている。そして、そうした言葉、意味内容がほとんどない記号をどれだけ知っているかで、子供の間の序列が決まるようでもある。

大人になるとは、抽象的な記号を覚えて喜ぶ愚をさと、具体的で直接的な知識の面白さを知ることでもある。だが、大人になりきれない人たちもいる。そういう人たちはいい年をして、シニフィエとかシニフィアンとかの記号で遊ぼうとする。そして、シニフィエがほとんどないシニフィアンをどれだけ知っているかで、人の序列が決まると思い込んでいる。

翻訳は一步誤れば外国語の記号を母語の記号に置き換えていくだけの作業だとされかねない性格をもっている。だから、記号遊びから抜けきれない人には理解が難しいと思う。

『eTrans Learning 4月号』(バベル・プレス刊)

『eTrans Learning』は雑誌『翻訳の世界』の後身。バベル翻訳大学院の公開講座を兼ね、「コース終了を条件にバベル翻訳大学院の単位を取得することも可能」とのふれこみだ。さぞ中身の濃い教材だろうと、期待して眺めはじめた。

*下線、太字、番号は私がつけた。

<文芸翻訳 担当講師：プロフェッサー* 柴田裕之>

*3月号の肩書き。4、5月号ではなぜか抜けている。

(p24)

翻訳英文法 今日のポイント

*時制 現在形、進行形

今日は、英語の時制のうち、現在形と進行形に的を絞って、直訳するとしっかりこないものの処理のしかたを考えます。

まず、現在形ですが、He teaches English. を直訳すると「彼は英語を教えます」となります。これでは、意味が釈然としませんね。内容から職業についての文だと判断し、「彼は英語を教えています」のように進行形を使って訳したり、「彼は英語の先生です」のように、名詞に変えて訳したりすると、よいでしょう。あるいは「英語の先生をやっている」のように、名詞に変えたうえで、進行形を使うこともできます。

I am leaving for Paris tomorrow. という進行形の文はどうでしょう。直訳すると「私は明日パリに向かって出発しつつあります」という変な日本語になってしまいます。これは、現在行われている動作ではなく、近い未来の動作を表わす表現なので、進行形で訳さず、「(私は)明日パリに向かって出発します」と現在形で言いければはっきりします。

このように、原文の内容をつかんだうえで、原文の時制や品詞に縛られずに訳するのが基本です。

私のコメント：

について

- ・「直訳」を筆者(またはバベル大学院)はどう定義しているのだろう。翻訳業界でいう直訳は「原文の構造を変えない。語義は基(コア)のものを探る。解釈は控える。文法的には正確である」こととおおむね一致している。だから、「訳文どんな感じでいきます?」「今回の原文、固い内容だから、直訳調で行きましょうか」などという会話が

日常的に交わされるのだ。筆者の考えていると推察される直訳は、文法的な正確さが無いがしろにされている。翻訳素人がわけの分からないことを評して言う、「なんか直訳みたいで... (わかりにくい)」の直訳と同じだ。仮にも「翻訳大学院」の公開講座なのである。素人のレベルに用語の定義を引き下げてもらっては困る。そういう観点でみると

- ・「英語を教えます」は瞬間的な動作または未来の行為ととられる恐れがあるので、直訳でなく、誤訳である。
- ・どうして「内容から職業についての文だと判断」できるのだろうか。論理的な説明がないのに学習者はどうやって「内容」を判断できるのか。いままでの英語学習は、いわゆる「直訳」から「正しい訳」になる間がブラックボックスになっていて、自分の頭が悪いのか、あるいは英語は日本人の思考過程と異なる理解プロセスを踏む嫌な言語なのかと思って、学ぶのをやめた学習者が多かったのではないか(実はわたしもそうだった)。何も翻訳英文法などという技法(?)を持ち出さずとも、ここは次のような簡単な説明をすればすむところだ。

英語には状態動詞と動的動詞があり、この teach は動的動詞である。動的動詞の現在形は反復をあらわす。つまり、過去も teach していたし、いまも teach しており、これからも teach する。そういう人は職業としての教師である。だから「彼は英語を教えています」「彼は英語の教師です」となる。

別の例：He writes novels. (彼は作家です)

について

これも直訳ではなく、文法を無視したための誤訳。

be ~ing 形は大きく分けて、次の四つの意味がある。

(1)現在進行中

例：We are arriving at Nagoya. (もうすぐ名古屋です)

(2)確かな予定

例：I'll be having guests next Sunday. (日曜にお客がきます)

(3)話者の感情

例：I'm hoping you will join us. (ご一緒できると)

嬉しいのですが)

(4)動作の反復

例：I am reading *Hamlet* in these days. (最近、ハムレットを読んでいる)

ここは tomorrow という未来をあらわす副詞により、(2)の意味ととれる。

正しい直訳は、「私は明日パリに向かって出発することに決めて、準備も整っています」

について

「原文の内容をつかんだうえ」ではなく、「文法的に正しく把握したうえで」としてほしい。英語はきわめて明晰な言語である。文法的に正しくつかめれば、自ずと内容はつかめるはずだ。

(p26)

Challenge & Practice

At eight o'clock sharp he called out, "The breakfast is ready!"

Hint!)最後の be 動詞 + ready は、そのまま現在形で訳すより、日本語では完了を表す過去形にしたほうが、感じが出ます。 sharp=きっかりに called out=call out (大声を上げる)の過去形 ready=準備ができている

直訳)八時きっかりに彼は「朝食の準備ができています！」と大声で呼んだ。

訳例)八時きっかりに彼は「朝食の準備ができました！」と大声で呼んだ。

Martha's parents bought her a car for her birthday. So, she is driving to school this term.

Hint!)is driving という現在進行形が使われていますが、これを「運転しつつある」というふうに、現在行われている動作として訳すと不自然です。この進行形は、ある程度の期間を通じて、くりかえされる動作を表しています。term=学期

直訳)だから彼女は今学期は学校に向かって車を運転しつつある。

訳例)(誕生日にマーサは親に車を買ってもらった。)だから、今学期は車で学校に通っている。

私のコメント：

について

「感じ」の問題だろうか？

Dinner's ready. (食事の用意ができました)、とジーニアス英和大辞典の例文にもあるように、この訳例)「できました」は間違っていない。だが問題は、なぜ「できています」でなく「できました」とするの

かだ。以下にその理由を述べる。

be 動詞は状態動詞 (...である)と思われているが、実は動詞 (...する)的に使われる場合もある。完全な動詞とはいえないから、変化動詞とか過程動詞 (...になる)としてもいいだろう。

例：I am a boy. (私は少年です。状態動詞「...である」)

I will be twenty tomorrow. (私は明日二十歳です。変化動詞「...になる」)

ready は形容詞「準備ができて」。

本文の場合、文脈次第で二つにとれる。

(1)「朝食の準備ができています」(状態)

(2)「朝食の準備ができました」(変化)

別の例：I am ready for school.

(1)「学校へ行く準備はできています」

(2)「学校へ行く準備はできました」

「感じ」で云々するのは、文法、論理、文脈面を点検した最後の手段にしてほしい。

について

「運転しつつある」ではなぜ不自然なのか受講者に説明せねばならない。

this term というある程度の期間を示す副詞と、一時的な動作である「...しつつある(しているところ)」がなじまないからだ。ここ、文法的解釈としては、上掲 p24 の(2)か(4)が当てはまるが、(2)より(4)のほうがよさそうと私も思う。そう、ここで初めて「感じ」が意味をもってくるのだ。だがその「感じ」も理由のないものではない。近い未来と読む手がかりが this term では弱い、また、紛らわしさを嫌って正しく近接未来に読ませようとするなら、So, she will be driving ~ と、客観性、確実性、丁寧さをあらわす未来進行形を使うだろうと、思えるからである。

(p30)

Challenge & Practice

Five civilians were killed in the recent suicide-bomb attack.

Hint!)were killed の部分が be 動詞 + 動詞の過去分詞形という受動態になっています。そのままでも訳せませんが、能動的に訳してみてください。

直訳)最近の自爆攻撃で一般市民五人が殺された。

訳例)最近の自爆攻撃で一般市民五人が亡くなった。

私のコメント：

について

何故能動的に訳すのか、その論理的根拠が示されて

いない。こういったカンや経験則を連ねていくと「翻訳は芸」ということになりかねず、この学校の提唱する「翻訳英文法」なるもの自体の存在意義が失われてしまうのではないか。

能動態に訳したほうがよい理由には、次の三つが挙げられる。

- (1) by がないことで、行為主体がおぼろ。
- (2) その場合の過去分詞は受動の意味より形容詞の意味に近くなる（「死んで」）
- (3) この be 動詞は変化を示す（「...になる」）。

それで「訳例」の「亡くなった」が導きだされる。筆者のいわゆる「直訳」の、「殺された」は誤訳といわないまでも十分に悪訳。

参考：Five civilians were killed in the recent suicide-bomb attack by the terrorist. と、行為の主体が示されれば、「殺された」となる。

<法律翻訳 担当講師：アシスタントプロフェッサー 清水和子>

(p58)

翻訳英文法 今日のポイント

* 法文中の趣旨を考慮し、時の表現を工夫しましょう

唐突ですが、一人旅の外国で道に迷い、途方に暮れている私を見兼ねて、地図を書いてくれた人が居たと想像してください。私は、精一杯の感謝を込めて、「Thank you very much」と言うでしょう。この時、私の中での日本語訳は、「（示してくれた好意に対する）有難うございます」であり、また、「（地図を描いてくれたという過去の行為に対する）有難うございました。」が **渾然一体** となっているでしょう。では、「I will be twenty year old next month.」 といった場合はどうでしょう。「来月、二十歳になるだろう」とは訳しませんよね。年齢を重ねるのは **自然の摂理** ですから、「来月、二十歳になる」と訳しますね。このように、日本語は、**機微に応じて、時制という観念抜きで過去、現在、未来を混在させ、縦横に表現する言語** なのです。「いいじゃないか！日本語の特性なんだから」と悠長に構えるのも、悪くはありません。しかし、時制に厳密な英文を訳す場合は、“頭痛の種”となります。特に、法律文翻訳では、**その寛容さ** を考慮しつつ、**一定の技法** でこの頭痛の種を攻略する必要があります。今週は、時制の一致を含めた時の表現を **日本語の感性に合わせて表現する技術** を学習してゆきましょう。

私のコメント：

について

- ・「渾然一体」「自然の摂理」「一定の技法」---自分の経験からもいえるが、文章に自信がないときほど空疎なことばで内容のなさを誤魔化そうとするもの。本文は論理的であるべき法律文の翻訳を扱っているのだ、大げさな言葉づかいは慎んだほうがよい。
- ・「機微に応じて」---コロケーションがおかしくないか？

広辞苑をひいてみる。きび[機微] 容易には察せられない微妙な事情・おもむき。「人情の---に触れる」。「機微に応じて...混在させ、表現する」とは、やはり言うまい。表現がおかしいと内容への信頼性も薄れてくるから、気をつけたほうがよい。

- ・「時制という観念抜きで過去、現在、未来を混在させ」---日本語はそんないい加減な言語なのだろうか？ 日本語に時制の観念がないわけではない。ちゃんと過去形はあるし、この「...になる」は未来を示す。現在形なら「二十歳です/だ」というだろう*。いや現在形と未来形の区別があいまいなのだというなら、英語だって動詞動詞の現在形が未来を示す場合があること（例：a house we make 我々が建てる家）との違いをどう説明するのか。第一、英語にはフランス語やイタリア語と違って未来形はなく、推測の助動詞 will などで代用させているのである。

* このあたり、日本語の動詞の時制については、久野すすむの『日本文法研究』を参照されたし

について

- ・「年齢を重ねる」のが「自然の摂理」というのだろうか？「日本語の感性」という割に、筆者は語感が鈍いようだ。英語の綴りも間違っている（ひょっとしたら知らないのか？） twenty year old twenty years old
- ・「二十歳になる」と訳す理由は、すでに上に述べた。「二十歳になるでしょう」としたら推測になってしまう。

について

「その寛容さを」---「その」が指すものは、まず直前のものを探して「法律文翻訳」かと思って読み進むと意味が通じない。一つ前の「英文」でもない。そこでさらに一つ前の「日本語」のことなのだ、と気づくありさま。これは悪文としかいいようがない。こんな文章を書いていて、きちっとした法律文の翻訳が出来るのだろうか？

(p60)

The defendant argued that the sale and purchase agreement was illegal and that therefore the said loan agreement which was dependent upon the sale and purchase agreement was also tainted with illegality and therefore void.

直訳) 被告は、『本売買契約は、違法であったし、その売買契約に依存していた当該融資契約も、また違法であったから、無効』、と論じた。

訳例) 被告は、『本売買契約は違法であり、従って、同売買契約に依拠して為された当該融資契約も、違法性を帯び、故に、無効である』、と論じた。

私のコメント:

について

英文のかかり方はきわめて鮮明。The defendant argued {(that S1+V1) and (that therefore S2+V2 and therefore V3)}

だが、訳例では「従って」(therefore)と「故に」(therefore)の格(文中の偉さでも言おうか)が分かりにくい。読み解いてみる。

被告は以下のことを論じた。

- (1) 売買契約は違法である。
 - (2) (従って) それに基く融資契約も、
 -) 違法性を帯びている
 -) (従って) 無効である。
- (1)から(2)が導かれる。)から)が導かれる。
- (1) (2) (大項目内での因果)
 - (2)) (2)) (小項目内での因果)

「故に」の語感が原文より強いため、訳文では「本売買契約は違法であり、...」から「...また違法性を帯び」までが一体に読めてしまう。実際は「違法性を帯びているから無効」を一体として読まねばならない。原語にある2つのthereforeの訳にあたり、(1) (2)のつながりを強く、(2)) (2))のつながりを弱く訳すべきところを、筆者は逆にしてしまっているから、読んでいてなにかしっくりこないのだ。

訳例を次のように修正してはどうか。

被告は、『本売買契約は違法であり、従って、同売買契約に依拠して為された当該融資契約も違法性を帯びるため無効である』、と論じた。

(p62)

翻訳英文法 今日のポイント

* 法文中の仮定的用法は、条件節と考えましょう

法律文書、特に、契約書は、当事者間の権利義務を規定するために起草されますから、「誰が、何を、どのような場合に」のごとく、状況を細かく限定し、或いは将来に生じ得るあらゆる状況を想定して記述するのが常です。

ですから、勢い、「if」「in case」「in the event」などを使用した条件節を多用しますし、この他にも、「should」を使用する仮定法表現も使用します。

例えば、「Should you fail to repay the loan, the mortgage shall be foreclosed.」という文章を直訳的に訳せば、「貴方が、本融資の返済を怠るならば、抵当権は実行されねばならない。」となるでしょう。前段部分は、あくまでも“仮定の話”であるにもかかわらず、何だか脅迫めいて聞こえませんか。如何に契約書が当事者の権利の張り合いであっても、やはり、相手方への配慮は必要でしょう。ですから、原文がたとえ現在形を使用している、「貴方が、本融資の返済を怠った場合、当該抵当権を実行するものとする。」と仮定としての前提を示していることを強調する趣旨で訳し、不履行の帰結としての事実を客観的に記述する翻訳技術が必要となります。無用の“角”を立てないためにも、仮定条件節中の動詞の時制に捉われず、日本語の感性を活かした訳を充てる訓練をしましょう。

私のコメント:

仮定法がこの筆者はよくわかっていない。だからのようなあいまい極まりない言い回しがでてくる。

について

- ・これは仮定法未来で、「未来についてのきわめて可能性の少ないこと」についていう表現法。それこそ直訳的に訳せば、「万一、貴方が本返済に応じない・応じられない場合には、担保権は実行されます」
- ・should が前に出て if が消えるのは文語文であるため。fail to は 1) = do not 2) = cannot の意味があり、ここは 1)だが、客観的な表現*。決して「脅迫めいて聞こえ」たりはしない。

* 日本語の「しない」「できない」はいずれも「色」がついてしまうが.....

いや、むしろ強く響くのは後段(帰結節、主節)で、shall が法的強制を感じさせる。ちなみに義務の助動詞をおおまかなながら強い順に並べてみよう。

shall > will > must > have to > need to > be to > had better > ought to > should

(should が「...すべき」ではなく「...したらど

う」ぐらいなのが分って面白いだろう)。

について

現在形であれば、If you fail to repay the loan, ~ となるはずだが。

これは if you should fail to ~ がひっくり返った形で、should が使われている以上、「現在形」ではない。文法用語は正しく使ってほしい。

について

いずれもわけのわからない饒舌。翻訳技術も感性もいらぬ。英語を正しく読み解ければすむことではないか。読者をケムに巻こうとしても、そうはいかない。

(p64)

Challenge & Practice

Should the Licensee have made any improvement in relation to the license grant, the Licensee shall inform the Licensor about the improvement without delay.

Hint!) 「should」の示す仮定条件中の動詞が現在完了となっていますが、「時点」や「時の経過」、また「経験」を意識する場面ではありませんから過去形で訳せばよいでしょう。ただ、条件を示したい場合は、

『時』ではなく「とき」と平仮名表記にします。直訳) ライセンシーが本ライセンスの許諾に関連して、改良を行った時は、遅れることなく、その改良について、ライセンサーに通知するものとする。

訳例) ライセンシーが本ライセンスの許諾に関連して、何らかの改良を行った場合、ライセンシーは、遅滞なく、これをライセンサーに通知するものとする。

私のコメント：

について

この説明、書いた本人は自分で何をいっているのか判っているのだろうか。和文和訳すると、「現在完了の役割といわれる継続・経験・結果・完了のどれをも強調するわけでないので、過去形で訳せ」ということなのか？ 次に正しい説明を記す。

ここは未来完了の代用。時や条件を示す副詞節中で未来完了の代わりに現在完了が用いられる形の変形。

「なされてしまった時点」に焦点をあてるためのもの。帰結節の without delay とあわせ、「そしたらすぐに通知しなければならない」と切迫感をあおっているのである。単なる過去形とは、それこそ「感じ」が違うのだから、それを訳文に出さねばならない。

「ライセンシーが本ライセンスの許諾に関連して、何らかの改良を行った場合は直ちに、ライセンシーはこれをライセンサーに通知するものとする」とでもしてはどうか。

この雑誌の内容は、大学受験生対象以下のレベルである。「翻訳英文法」なるものの再構築を望みたい。

ご案内

柴田 耕太郎 主宰

『英文教室』

【英文を読む技術】講座

英文を一点の曇りなく明晰に読み解く

講座：全33回(短文の英文エッセイ)

月曜クラス：19:00~20:30

火曜クラス：15:00~16:30

講座：全24回(幅広いテーマの文章)

第1・第3火曜日 19:00~20:30

講座：全24回(海外の短編小説)

第2・第4火曜日 19:00~20:30

【英文を読む技術】講座 5/24(火) 開講

日本語の小説を読む感覚で、海外小説を楽しむ

夏季特別セミナー開催

[本当の声に出して読みたい日本語] 講座と

[演劇人のための翻訳戯曲] 講座の初のコラボ

7月20日・21日・22日の3日間(計6時間)

詳細は <http://www.wayaku.jp>

(株)アイディ

〒162-0054 東京都新宿区河田町7-6 ID 河田町ビル TEL: 03-3357-1189
E-mail: eibun@id-corp.co.jp 柴田 耕太郎 主宰 『英文教室』 事務担当

翻訳者にとって使い勝手のいい類語辞典 藤本直編著『類語玉手箱』

英和辞典の訳語に満足できず、かといって自分ではぴったりの訳語が思いつかないとき、類語辞典を引く。

本誌 2003 年 3 月号で山岡洋一氏が講談社の『類語大辞典』を取り上げ、いままでで一番の類語辞典ながら、なかなか思うように役立ってはいくれないと述べている。類語辞典は引いて失望することが多く、『類語大辞典』では失望する頻度がわずかに下がった程度だというのが。私は角川書店の『類語新辞典』を使っていたが、ぴったりする語が見つかることはまれで、がっかりすることのほうが多かったので、大いにうなずいてしまった。

2003 年 9 月には、大修館書店から『日本語大シソーラス 類語検索大辞典』という大部の類語辞典が出た。32 万語句収録のこの辞典、広辞苑並みの厚さと大きさで、定価は 1 万 5 千円（税抜）。7 万 9 千項目収録の講談社の『類語大辞典』でも片手では容易に持てないサイズなのに、それを上回る重量感だ。

もっとスペースを取らなくて、気軽に引けて、あまりがっかりしない類語辞典はないだろうか、と思っていたところ、CD-ROM 版の類語辞典があることを知った。ノンフィクションを多く手がける翻訳者の藤本直氏が 30 年かけて作りあげた『類語玉手箱』で、収録語句数は 40 万と、『日本語大シソーラス』をしのいでいる。CD-ROM 一枚なので、もちろんスペースは取らないし（ハードディスクにダウンロードしても容量をほとんど取らない）、値段も 4500 円とお手頃。さっそく購入してみた。

これが実に使い勝手がいい。仕組みは簡単で、ウィンドウズのエクセル・ファイル形式だ。最初の列に見出し語が並び、隣の列に類語が羅列されており、エクセルソフトの検索機能を活用して、目当ての語句を検索する。ちょっと思ったたらショートカットのアイコンから立ち上げて、語を入力し、検索ボタンをクリックするだけ。

角川でも講談社でも大修館でも、ある特定の語の類語を調べるには、2 段階を経なければならない。まず索引をめくって語を探し、そこに出ている分類番号のページをめくる。「寂しい」など、さまざまな意味の側面を持つ語を調べると、分類番号もいくつか出ていて、目当ての意味にあたるまでめくり続けなければならない。そのあげくにぴったりの類語が見つからないと失望感は大きいし、それだけ手間をかけているうち

に、どんなニュアンスの言葉がほしいのか忘れてしまいかねない始末。それが『類語玉手箱』なら、席を立つ必要もなく、すぐに検索できてしまう。

たとえば「寂しい」を検索すると、その類語は意味の側面ごとに分類され、5 段にわたって羅列されている。まず「家族・仲間などがなく寂しい」の項に「淋しい・さみしい・（天涯）孤独・寄る辺のない（身の上）・独りぼっちの・わびしい」など 17 語句。「様子・情景などが寂しい」の項には「寒々とした・廃（すた）れたような・さびれた」など 16 語句。ほかには「暖かさ・助け合いなどがなく寂しい」「人間存在・生きることなどが寂しい」「姿・音色などが寂しい」の項があり、さまざまな類語が一度に見渡せる。

分類のおかげで望むニュアンスの語句にたどりつきやすいし、ぴったりの語句が見つからなくても、たくさんの類語を眺めているうちに様々な発想が得られるので、いい表現が思い浮かんだりする。引くのに手間がかからない分、そうした余裕も生まれ、引いてみてがっかりすることはずいぶん減った。

翻訳者が編集しただけあって、翻訳者にとって使いやすいつくりになっているのかもしれない。実際に訳して使える語句が多いし、用例や意味解説は基本的に載っていないものの、「寄る辺ない（身の上）」「ぼつんと（立つ）」「（胸に）ポツカリ穴があいたような」のように最小限の形で用例が織り込まれていてありがたい。

この手軽さ、内容の充実ぶりから、いまではほとんどこれしか類語辞典を引かなくなった。簡単なエクセル・ファイルなので、載っていない語句を自分なりに足していくことだってできる。『類語玉手箱』は翻訳者にとって使いやすく、本当に役立つ類語辞典だ。

『類語玉手箱』はインターネットを通じて個人販売されている。詳しくは以下のホームページ参照。

<http://homepage3.nifty.com/hagihori/>